

令和2年度（第57回）富山短期大学卒業式学長式辞

ただ今は354名の皆さんに、2年間の学びの証として、卒業証書、修了証書、学位記をお渡ししました。ご卒業、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

戸惑い・悩みながらも、皆で協力して楽しく過ごした学生生活。卒業する皆さんはコロナ禍であっても、ここ富山短期大学で仲間とつながり、共に学び共に育ち合って、専門的にも人間的にも大きく成長してきました。皆さんには、食と健康、保育・幼児教育、情報とビジネス、福祉・介護など、これからの地域の暮らしを支え、地域の産業を担う大切な存在として、大きな期待が寄せられています。皆さんには、新しい時代・新しい社会の主人公として、失敗を恐れない果敢なチャレンジを期待します。

□

さて2020年東京オリンピックは、依然として先行きが不透明です。「パラリンピックの父」グットマン博士は、戦争で傷つき障害を持った人たちに「It's ability, not disability」と声をかけてきました。これを日本の整形外科医・中村裕博士は、「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」と翻訳・紹介して、1964年東京オリンピックに続いて第2回パラリンピック大会を実現させました。

それから半世紀経った今日、コロナ禍で私たち学校の様子も一変しました。遠隔授業、学内実習への振替え、学科や学生会のイベント、サークルやボランティア活動の中止など、共に学び共に育ち合う場と機会が失われてしまいました。かけがえのない青年期の発達課題、自分は何者なのか？自分の人生の目的は何なのか？心理学者エリクソンが唱えた「自我同一性を確立」する大切な時期に、極めて手痛い喪失でした。社会全体でもSocial distanceが叫ばれ、人と人との距離が引き離され、お互いの「絆」を確かめ合い、支え合う機会が失われてきました。

□

その一方でコロナ禍は、新しい生活様式New normalへの飛躍的な革新をもたらそうとしています。オンライン教育やテレワーク、スマホ決済やオンラインの行政サービスなど、デジタル化社会Society5.0に向けた社会経済システムの構造的な転換が急速に進みつつあります。私たちは、コロナ禍で失われたものを数えるのではなく、新しい生活様式がもたらす新しい可能性を最大限に

生かしていくことが求められています。

またコロナ禍で迎えた東日本大震災 10 年の今、「共に在って、共に生きること」の大切さが改めて思い返されています。

私たちは、コロナ禍で失われたものを数えるのではなく、残されたもの、いや、ホモサピエンスの誕生以来、受け継がれてきた人類固有の DNA「共存・共生」の精神と習性を最大限に生かし、知恵と勇気を持って新しい人生、新しい社会へのチャレンジを続けて行きたいものです。

皆さんが、コロナ禍でも成し遂げたミニ大学祭、学科の縦割りを超える地域連携活動やサークル活動は、その新しいチャレンジへの第一歩でもあります。

就職する皆さんには、家庭や地域、職場や社会から信頼される職業人となるよう、さらに自分を磨き、高めるチャレンジを続けて下さい。また四年制大学に編入学する皆さん、専攻科を修了した皆さんには、より幅広い視野で学びを深め、より高い目標をめざして一層の勉学にチャレンジして下さい。

□

結びに、今日から皆さんは、58 年の伝統と実績をもつ富山短期大学の誇り高い卒業生 2 万 2820 名の同窓会あやな会、そして幼稚園・保育所から大学までを擁する総合学園・富山国際学園グループのファミリーでもあります。校歌の一節「清らなる知性、誠あるところ」は、学園共通の DNA であり、生きる指針・心の支えでもあります。

皆さんの人生が、健やかで幸せな人生でありますようお祈りして、贈る言葉と致します。

令和 3 年 3 月 17 日

富山短期大学長 宮田伸朗